

不安とセキュリティ不安を煽る犯罪報道言説とネオリベリズムー

飯島伸彦（名古屋市立大学）

本報告では「不安とセキュリティ」の問題をメディアの犯罪報道のあり方に焦点を当てて検討する。報告は以下のように進める予定。

1. この15年間ぐらいの間の日本社会のマクロ社会変動のなかで、不安が生み出され、広がり、セキュリティが問題になる「客観的な原因」がある。その「客観的原因」を企業社会統合+開発主義国家の新自由主義的再編、というとらえ方や「リスク社会論」（ベック・ギデンスなど）や管理社会論（フーコー・ドゥルーズ）などを対比させつつ、位置づけることをまず試みる。
2. 次により個別的分野として犯罪をめぐるメディア言説の編成の変化について検討する。その際に①まず犯罪・治安をめぐるメディア言説のこの15年ぐらいの変化の特徴を押さえたうえで、②具体的事例としてニュース番組（例えば報道ステーションやニュース23、ニュースウォッチ9など）の犯罪報道の事例を、その問題点とともに検討する。犯罪被害者報道の比重が増大してきている点、加害者への憎悪と不安が掻き立てられている点、「不安と憎悪の共同体」（想像の共同体＝ベネディクト・アンダーソン）がメディアと受け手の相互作用のなかで作られている点、その結果、「体感治安」が悪化しており、犯罪厳罰化の流れ、セキュリティの向上の流れが作りだされている点などを具体的に検討する。
3. 個別分野における不安の煽り、広がり、セキュリティ向上への動きが、いわゆる新自由主義的再編とどのように関連しているか、格差社会が進行するなかで世代や階層、ジェンダーの差異によって生み出されている様々な不安と、メディア言説の上記のような動きがどのように連関しているか、「相乗効果」をもたらしているかを検討する。
4. 最後に、メディア言説上、マイノリティ、少年・若者、女性、外国人に対する選択的な排除・隔離、ダブルスタンダード化（格差の正当化など）、他者化、敵視化がどのように起きているか、メディアの送り手にのぞまれることは何か、メディアの受け手はどう読み取るべきか（メディア・リテラシーの問題）について問題提起してしめくくりたい。